

---

# 前兆

寿々

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

前兆

### 【Nコード】

N0162B

### 【作者名】

寿々

### 【あらすじ】

日番谷とルキアが現世で、一護と一緒に大虚を倒す話。現世の虚がソウル・ソサエティに流れ込むというありえない事態もバンバン起こっています。

(前書き)

この小説は、「日番谷が現世に来る話を！」というリクエストに答えた小説ですが、戦っているだけで想像していたのと大幅に違ってるかもしれません。この程度くらいが限界です。すいません。

「警戒警報！警戒警報！西流魂街に大虚出現！」  
それは、日番谷の今日一日を知らせる警報だったかもしれない。

「西流魂街に大虚？隊長格が出て行くほどのもんじゃないじゃろう。  
会議を続ける！」

護廷十三隊総隊長、山本元柳斎重國は冷静に言い放った。

日番谷はその様子を退屈そうな目で見ていた。

どうせすぐ終わる会議なんだから、虚倒しに行くほうがまだ、と。  
日番谷の読みどおり、会議は10分も経たないうちに終わった。  
隊舎に帰ると、乱菊が感心したような目で窓の外を覗いていた。

「なにやってんだ。お前」

「いや、今回の虚はすごいなーと思ひまして。

あんなの雑魚死神で倒せんのかな・・・」

乱菊の言葉どおり、虚は流魂街で暴れまわっていた。

日番谷は目もくれず、書類に手を伸ばした。

一方、此方は更木隊。

「ねーねー剣ちゃん。見て見て、虚がいつもより強いよー。

ね？つるりん？」

草鹿やちるが楽しそうに更木と一角に声をかける。

「くだらねえ。虚と戦ってどこが面白いんだ」

「そうですね、副隊長。あと、そのあだ名はやめろっつったろドチ  
ビ」

そして、再び十番隊隊舎。

さすがの乱菊も飽きてきたのか、渋々書類に手を伸ばした。

その時だった。乱菊がふと顔を上げて外を見ると、虚の数が激増し

ていた。

「ちよつと・・・隊長。あれ、けっこーヤバイ状態なんじゃ？」

乱菊が呟いたとたん、警報が発令された。

「警戒警報！警戒警報！虚の数が激増！セイレイテイ内侵入有！

隊長格はすみやかに指定された場所に移動せよ！」

乱菊がわーつと声を上げた。

「すごいすごい！虚ごときで隊長格出すなんてー！

でも、これいくらなんでも多いですよ？現世あたりから流れ込んでるんじゃない？

ま、そんなことありえないか」

この時の乱菊の冗談じみた発言は、真実を伝えていた。

日番谷は、警戒警報発令中なのに、なぜか総隊長の所に呼ばれていた。

そこには、十三番隊朽木ルキアもいた。

「朽木？お前なんでココにいるんだ？」

「え・・・と、山本総隊長から、集令を受けました」

2人がわけの分らないという顔をしていると山本元柳斎重國は重い口を

静かに開いた。

「これからおぬし等2人には現世に行ってもらい虚を倒してもらおう」

日番谷は顔をゆがめ、ルキアは驚いたような顔をした。

「虚は現世からこっちへ来たんですか？」

「それでも、現世には死神代行黒崎一護がいるはずだと思うのですが・・・」

元柳斎はぴしゃりと言いつつ放った。

「おぬし等はこれから現世へ行き、死神代行黒崎一護と連携・合流して

ウェコムンドから流れている虚を倒す！これは総隊長命令じゃ！」

「は・・・はい！」

「まったく・・・阿散井に行かせりゃいいのに」

ぶつくさ文句を言いながら、日番谷は地獄蝶を解き放つ。

「でも、ウエコムンドから流れているって・・・」

やっぱり藍染の仕業でしょうか？部下とか平気で殺してそんな奴だから・・・」

「そーなんじゃねーの？余計な仕事増やしやがって！」  
コツンコツンと足音だけが響く。

「黒崎くん。虚だよね？あれ。死神代行として倒さなきゃダメなんじゃないの？」

黒崎と呼ばれたオレンジ頭の少年はうげえ、というような顔をした。

「井上。発見してくれるのはありがたいけど、いくらなんでも多いだろ」

「そうだね。どうしちゃったんだろうね？」

井上と呼ばれた少女は空の一点をじっと見ていた。

その横にいるのは死神代行黒崎一護。

空が黒くなった。

雨がばしゃばしゃと降ってきた。

その空中で一護は虚と戦っている。

それを見守っているのが井上織姫。

「井上！井上！」

どこかから聞きなれた声がする。

この声は

「朽木さん？」

「こっちだ！井上！」

声のするほうを見ると、朽木ルキアと日番谷冬獅郎がいた。

「で、ソウル・ソサエティにまで虚が流れ込んでるからこっちまで倒しにきたの？」

「そういうことだ。で、井上、お前は戦わないのか？」

「え、ううん。さつきから孤天斬盾とかしてるんだけど全然数へらなくて。で、ちよつと疲れちゃったから」

ルキアは考え込んだ。

「いくらなんでもおかしくないですか。日番谷隊長」

「ああ、多分これは、虚の親玉を突かなきゃ終わらない」

「やっぱり、という顔をしてルキアは立ち上がった。

「どこか行くの？」

「ちよつと親玉探しにな。井上はここにいろ。

「おーい！一護！聞こえるか！私だ！ルキアだ！」

それまで必死で戦っていた一護が、ようやくこちらを振り向いた。

「ルキア！？冬獅郎！？どうして・・・」

「詳しい説明は後だ。私と日番谷隊長で虚の親玉を探す！

「ここは井上に任せるからお前もこい！」

「井上一人に！？それは無理だろ！」

ルキアが顔を歪めた。

「たわけ。何を調子に乗っておる。石田やチャドだつているだろう。

それともあれか？お前はここで井上を守っておきたいってか？」

「な！？んなわけあるか！分かった！行く！行くからちよつと待ってる！」

一護は空中から地面に下りてきた。

どうせまた上がるのだからあまり意味はないが。

「よし、じゃあ行くぞ一護！日番谷隊長の後を追え！」

「わーってるよ。井上ー！頼んだぞー！」

遠くで織姫が手を振っている。

「まかせてー！！！」

虚を倒しながら、3人は先へ進んだ。  
たまたに石田雨竜の弓矢が飛ぶ様が見える。

「ココか？」

「はい、たぶん」

「ここ、前に石田と一緒に戦ったところだ」

「あ？ああ、あのときか」

3人は適当な雑談をしていたが

急に真剣な顔になって空を睨み付けた。

「……………来るぞ」

「はい」「分かってる」

一護とルキアが同時に答えたとき

空がひび割れて、亀裂が入り

大虚が飛び出してきた。

「舞え！袖白雪！」

「霜天に坐せ！氷輪丸！」

「斬月！」

それぞれが斬魄刀解放をはじめた。

そしてすごいスピードで斬りかかっていく。

空には3人の死神と一匹の虚。

その死闘の様子を一人の男が見ていた。

藍染惣右介。

ソウル・ソサエティから追放された

反逆者。

「このていどの虚に3人がかり。

護廷十三隊も落ちぶれたものだね」

すると、おくから声が、

「それは、あんたはんが出て行ったからじゃないんですの？」

市丸ギン。藍染の忠実な部下。

「そんなことは無いだろう。」

でも、これが今の彼らの実力さ」

「そうやね」

潰せる。

今度こそ絶対に

ソウル・ソサエティも

黒崎一護も

完璧に潰してやる。

闇の奥で

悪魔が、囁き、嘲笑った。

「終わったー！親玉倒せたー！」

一護が空に向かって叫んだ。

「日番谷隊長。これでもう、ほんとに終わりなんですか？」

「ああ、きつとな。見てみる。虚たちが消えていく」

日番谷の小さな手が指差した方向では、虚たちがもがきながら消えていった。

「終わったぞ一護！で、私たちはソウル・ソサエティに帰る。後のことは任せたぞ」

「えー、もうちょっとゆっくりして行きゃいいじゃん」

日番谷は二人の様子を見ていた。

「帰らなければいけない」だの「もう少しいろ」だの。

日番谷は予感していた。

これからもつと凄いことが起こるはず。

だから

いま少し休息しても

罰はあたらないはずだ。

「朽木ー。少し休んでいくぞー」

「ええ！？日番谷隊長までそんなこといいだして・・・」

3人は、井上織姫が待つ空座高校へと  
軽い足取りで向かっていった。

「あ！みんなー！お帰りーっ！」

高校では、屋上で織姫が手を振っていた。

「大丈夫？怪我とかしてない？」

「大丈夫。かすり傷程度だ」

ルキアが義骸に身を包んだ後、晴れ晴れとした声で言った。

「どこか遊びに行きたいな！」

織姫が嬉しそうな声で答える。

「それならね！少し行ったところにあんみつ屋があるの！

甘くておいしいんだよ」

行く！というルキアの一声が掛け声になって、2人は走り出した。

「元気だな・・・」

「そーだな」

日番谷と一護も歩き出した。

歩幅をあわせて、ゆっくりと。

「おい。ゆっくり歩いてるうちに2人とも見失ったぞ」

「あー、ヤバイ。あんみつ屋の場所知らないんだけど」

「ここはお前の町だろうが」

歩きながら二人は笑った。

こんなひと時も悪くない、と。

「それが甘いんだよ。日番谷くん」

悪魔の警告は、日番谷の耳には届いていなかった。

(後書き)

何かおかしなところがあったら  
小説評価に書いて送ってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0162b/>

---

前兆

2010年10月11日00時19分発行